



ショートコメント

★★★★★

Data 2024-86

あゝひめゆりの塔

1968 年／日本映画

配給：日活／125 分

2024（令和6）年12月17日鑑賞

シネ・ヌーヴォ

監督：舩田利雄

原作：石野径一郎『ひめゆりの塔』

出演：吉永小百合／浜田光夫
／和泉雅子／二谷英明／高品格／郷鏝治
／小高雄二／杉江広太郎（杉山弘太郎）／
藤竜也／深江章喜

👁️👁️ みどころ

本作を DVD で観て評論を書いたのは 2020 年 1 月 23 日。2019 年 11 月 17～19 日に念願の沖縄旅行を終えた直後だった。そのため、本作後半の舞台となるアブチラガマの姿も、また洞窟内の病院におけるひめゆり部隊の悪戦苦闘する姿も、実感しながら鑑賞することができた。

1968 年製作公開の本作は、“明治 100 年”の記念作として作られたが、同時に同作は“戦後 20 年”の視点から“あの戦争”を振り返るものでもあった。しかし、本作を大スクリーンで観た 2024 年の今は既に戦後 80 年！世の中は何もかも変わってしまい、本作の観客もかつてのサユリストを中心とした、じいさん、ばあさんばかりだ。

日本原水爆被害者団体協会（日本被団協）のノーベル平和賞受賞は喜ばしいが、やはり若い世代への本作の継承が不可欠だ。サユリストの一人として、2025 年の終戦記念日には更なる「吉永小百合映画祭」で本作の大規模な上映が企画されることを期待したい。

—— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * ——

◆2024 年 8/15 は、1945 年 8/15 の終戦から 80 周年の節目になった。また、2025 年は、昭和だけで数えると昭和 100 年の年になるため、産経新聞はそれを特集している。さらに、「ユーキャン通信販売事業部」は、「精選大全集 昭和の流行歌」CD 全 20 巻の販売に熱を挙げている。

他方、1968 年は明治元年（1868）から 100 年の年にあたる。もっとも、1968 年は、それ以上に 1967 年 4 月に大阪大学に入学した私が、最も学生運動に熱中していた時期で、マルクス・レーニンの古典や社会主義に関する各種文献の他、司馬遼太郎の『坂の上の雲』等の名作小説に夢中になっていた時期。したがって、その当時に『あゝひめゆりの塔』と聞いても、「日本帝国主義、軍国主義大日本帝国の成れの果て！」と吐き捨てていたかもしれない。

しかし、2019年11/17～19の沖縄旅行ではじめて、ひめゆりの塔や糸数アブチラガマ等の見学をした後の2020年1/23に本作を2020年のDVDで鑑賞し、評論を書いた『シネマ 47』245頁）(別添資料として添付しておく)が、その時の私のスタンスは、そんな1968年当時とは大違い。したがって、DVD鑑賞から約3年後の2024年12/17、「銀幕デビュー65周年記念 吉永小百合映画祭」の企画によって、はじめて本作を大スクリーンで鑑賞することができたことに感謝！

◆本作をはじめてDVD鑑賞した時、私はディスコのシーンから始まる本作に違和感を覚えた。しかし、司会者から沖縄の歌である『相思樹の歌』をリクエストした理由を聞かれた、渡哲也扮する青年が「この人たちを見ているうちに思い出したんですよ。同じ世代の若者たち、沖縄師範の女学生たち。この歌を歌い、そして死んでいったんですよ。」と答えた後、さらに司会者からの「つまり今日の時点から、戦争当時のことを考えようとなさるんですね。戦争で死んでいった当時の若者たちと、ここで踊っている若者たち。」との再質問に、「いやあ。あれから20年、その20年の時間が持つ意味ですよ。」と囁みしめるように答えるシーンには、妙に納得したことを私はしっかり覚えている。

日本では、終戦記念日となる8月15日には毎年さまざまなイベントが開催されるし、その直前の8月6日には広島市原爆死没者慰霊式と平和祈念式、8月9日には長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典とが開催され、定着化している。さらに2024年には、日本原水爆被害者団体協議会（被団協）がノーベル平和賞を受賞したことが大きな話題を呼んだ。しかして、戦後80年の今、私があらためて本作を鑑賞してみると、渡哲也扮する青年が語っていた戦後20年云々の考えと私が感じる考えとは大きく異なるはずだ。

◆本作の本格的ストーリーは、1944年6月のサイパン島の陥落によって、B-29爆撃機による日本本土への爆撃が現実化する前の1943年夏、沖縄師範学校女子部の生徒たちが運動会を楽しむシークエンスからスタートする。先生たちの話題は、もっぱら「本当に沖縄爆撃や米軍による沖縄上陸はあり得るの？」だったが、1945年3月10日の東京大空襲や同年3月13日の大阪大空襲を考えても、沖縄への爆撃と沖縄への上陸作戦は必至！それが予測できたからこそ、疎開船・津島丸に子供たちだけを乗せて先に疎開させたわけだが、何とその津島丸に沈没の悲劇が降りかかってきたから大変！

本作の主人公は、吉永小百合扮する女子師範の生徒・与那嶺和子だが、小学校の教師である和子の母親（乙羽信子）は生徒たちと共に対馬丸の中にいたから、その死亡は確実だ。そのため、和子は弟と2人きりになってしまったが、空襲が始まって沖縄師範学校に爆弾が落ち、沖縄師範の女子生徒たちが卒業を待たずに「ひめゆり部隊」に徴集されると・・・？

75歳を迎えた私は年月の経過の早さを日々実感しているが、沖縄戦が展開された1945年4月から6月までの和子たちの時間の経過は当然それ以上のスピードだったはずだ。艦

砲射撃に続く大量の米兵の沖縄への上陸作戦が始まると、たちまち沖縄全土は地獄と化していくことに・・・。

◆2020年2月7日のロシアによるウクライナ侵攻から始まったウクライナ戦争は、2025年2月には丸3年を迎える。ウクライナ戦争は、大国ロシアに欧米の支援を受けた隣国ウクライナが何とか対抗する形で一進一退を繰り返してきたが、双方ともその被害は甚大だ。そんな状況下、トランプ氏の大統領選勝利と2025年1月20日の大統領就任式を前に一気に和平への期待が語られ、水面下でのさまざまな交渉がなされている。

私はウクライナ戦争の和平（戦争終結）については、ウクライナが侵略された領土を一定諦めることもやむを得ないと考えているが、それは本件に見る沖縄戦の悲劇やひめゆり部隊の悲劇を見れば明らかだ。サイパン島が攻略され、B29による本土爆撃が可能となった1944年6月の時点で、日本の反転攻勢と戦争の勝利がなくなってしまったことはマスコミを含むすべての国民の目に明らかだったはずだ。ところが、その中で「和平交渉」など口にすればたちまち国賊（非国民）として憲兵隊に逮捕され、監獄送りにされていたことは確実。つまり、戦争を遂行している軍部だけではなく、マスコミをはじめ物事を理性的かつ現実的に考えなければならぬ者たちがすべて、「鬼畜米英」、「神風日本」と洗脳されていたため、これ以上の犠牲を防ぐためには一定の領土の喪失を甘受しても、あえて戦争を終わらせるという“負の決断”を誰もできなかったということだ。そんな“負の決断”は広島、長崎への原爆投下によってやっと実現したのだから、人類史上最も悲惨な原爆投下にも「戦争の終結」をもたらしたという大きな効果があった、という説を誰も否定することができない。

◆そんな視点で考えると、沖縄（地上）戦の意味は一体どこにあったの？圧倒的な物量で全島の制圧にかかる米軍に対して、日本軍の組織的な抵抗は数日間あったものの、それが途絶えると、その後は軍も民間人も、そしてひめゆり部隊もただ逃げ回るだけだ。

本作はそんな状況下でも何とか生き延びようとするひめゆり部隊や吉永小百合扮する和子の姿を描いている。しかし、沖縄（地上）戦が始まった1945年4月を待たず、遅くともサイパン島が陥落した1944年6月以降に、一定の領土の割譲を含む大日本帝国の降伏による太平洋戦争終結（和平交渉）を目指していれば、沖縄戦の悲劇もひめゆり部隊の悲劇も避けられたはずだ。もちろん、私がその時代に生きていても、それを堂々と主張する勇氣は持ち合わせていないだろうが、少なくとも2024年の今、あらゆることを偉そうに、“我こそ正義”のような報道を続けている某新聞には、その当時その程度のことを主張してほしかった。私はそう思っているが、さて、あなたのご意見は？

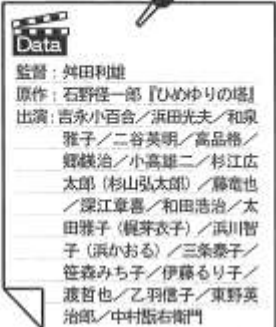
2024（令和6）年12月23日記



あゝひめゆりの塔

1968年/日本映画
配給：日活/125分

2020（令和2）年1月23日鑑賞 DVD鑑賞



Data

監督：舩田利雄
原作：石野径一郎『ひめゆりの塔』
出演：吉永小百合／浜田光夫／和泉雅子／二谷英明／高品格／郷鍬治／小島雄二／杉江広太郎（杉山弘太郎）／藤竜也／深江章喜／和田浩治／太田雅子（梶芽衣子）／浜川智子（浜かおる）／三条泰子／笠森みち子／伊藤るり子／渡哲也／乙羽信子／東野英治郎／中村錦右衛門

みどころ

2019年11月17日～19日の沖縄旅行での、ひめゆりの塔や糸数アブチラガマの見学は衝撃だった。

「ひめゆりモノ」は過去4作ある。吉永小百合、和泉雅子、浜田光夫らの日活青春スターが織りなすそれはあくまで日活風だが、それなりに興味深い。戦後75年の今年、「戦争大作」が予定されていないのはなぜ？それでいいの？そんな反省の中、昔のDVDを鑑賞！

『相思樹の歌』は知らないが、本作には『ふるさと』『仰げば尊し』の他、軍歌も『島唄』も登場！また、卒業式や水浴びのシーンには一種の清涼感も。しかし・・・。

沖縄特有のアブチラガマでのひめゆり学徒隊の任務遂行の悲惨さは想像を絶するもの。青酸カリ入り牛乳や手榴弾を含め、今の日本の平和の裏には、彼女たちの悲劇があったことを忘れてはならない、そのことを改めて痛感！

■今年！今年の夏の戦争大作は？■

私が大学に入学したのは1967年4月。その当時は、日活は青春映画、東映はヤクザ映画、松竹はメロドラマ、大映は勝新と市川雷蔵の映画を主に撮っていた。それに対して東宝は、加山雄三の青春映画の他、終戦記念日たる8月15日に向けては、毎年戦争映画大作を作っていた。『日本のいちばん長い日』（67年）、『聯合艦隊司令長官山本五十六』（68年）、『日本海大海戦』（69年）、『激動の昭和史 軍閥』（70年）、『激動の昭和史 沖縄決戦』（71年）『シネマ3』338頁がそれだ。当時はそんな気骨のある映画製作方針を見せていた（？）東宝だが、さて、今は・・・？

それはともかく、そんな時代にあって、吉永小百合と浜田光夫が青春映画ではなく、沖

縄のひめゆり部隊の悲劇を描く映画で共演した本作が、1968年9月に公開されていた。中学、高校時代は、自宅から歩いて行ける3本立て55円の映画館で、吉永小百合・浜田光夫コンビの映画をたくさん観ていた私だが、大学に入り、学生運動に没頭するようになると、日活映画の鑑賞はほとんどなくなった。そのため、和泉雅子や渡哲也さらに太田雅子（梶芽衣子）等の「日活青春スター」がオール出演した舩田利雄監督の本作も見逃していたが、2020年1月23日の夜中にこれをDVDで鑑賞。これは、昨年11月17日～19日の沖縄旅行で、南部戦跡巡りをする中で、ひめゆりの塔と糸数アブチラガマの見学をしたことを契機にしたもの（下記写真のとおり）。その直後から、ずっと持っている本作のDVDを観なければと思っていたが、偶然それが1月23日の夜中に実現したわけだ。

日本は停戦と後退を続けた平成の30年間を終え、2020年という戦後75年の年を迎えたが、さて、今年の夏の戦争映画大作は？まさか、東京2020のオリンピックに浮かれて、1本もそれが作られないということはないと思うのだが・・・。



ひめゆり平和記念資料館を見学



ひめゆりの塔で献花

■□「ひめゆりモノ」は戦後4本！その時期は？評価は？■□

広島の前線投下の悲劇を描いた映画は多いが、その代表は関川秀雄監督の『ひろしま』(53年)と、新藤兼人監督の『原爆の子』(52年)。私はこれもDVDで保管しており、何度も観ているが、観るたび胸が痛くなるのは当然だ。

それに対して、「ひめゆりモノ」は、本作を含めて次の4本がある。

- A 今井正監督『ひめゆりの塔』(1953年)
- B 舩田利雄監督『あゝひめゆりの塔』(1968年)

C 今井正監督『ひめゆりの塔』(1982年)

D 神山征二郎監督『ひめゆりの塔』(1995年)

4本の中では、終戦から8年後の1953年に公開されたAが、本土に復帰していないため沖縄での撮影ができなかったにもかかわらず、最も出来が良いと言われている。Cは、今井正監督が沖縄で撮影したリメイク版だが、これはあまり評判がよくないようだ。また、Dも評判はイマイチ。しかし、私が鑑賞した日活の青春スター総出演によるBの出来は？

■本作は戦後20年！冒頭はディスコの場面から！■

『戦争モノ』は東宝の得意分野で、日活は苦手。また、吉永小百合・浜田光夫コンビも、『若い人』をはじめとする石坂洋次郎原作の戦後の青春モノは得意だが、戦争映画、しかもひめゆり学徒隊の一員として、汚れ役、死んでいく役を演じるのは苦手なはずだ。そう思っていたのに、本作冒頭はディスコで若者たちが踊り狂っているシーンから始まるので、アレレ……。たしかに、本作が公開された1968年当時は「ディスコブーム」だったが、なぜ、『ひめゆりモノ』がこんなシーンから始まるの？

これは坪田監督が苦労して考えた演出で、そこでは特別出演している渡哲也扮する青年が登場する。司会者から、沖縄の歌である『相思樹の歌』をリクエストした理由を聞かれた彼は、「この人たちを見ているうちに思いついたんですよ。同じ世代の若者たち。沖縄師範の女生徒たち。この歌を歌い、そして死んでいったんすよ。」と答えたから面白い。それを受けた司会者がさらに、「つまり今日の時点から、戦争当時のことを考えようとなさるんですね。戦争で死んでいった当時の若者たちと、ここで踊っている若者たち。」と噛みしめるように答えていたが、さてその意味は？この青年は一体何者？そしてまた、『相思樹の歌』とは？

■導入部は日活色がブンブン！だが、対馬丸沈没以降は？■

『ひめゆりモノ』を楽しむためには、最低限、米軍によるサイパン占領(1944年6月)以降に開始された本土空襲の状況や、沖縄上陸作戦に向けた米軍の侵攻状況を、時系列に沿って理解する必要がある。また、米軍の沖縄への上陸は1945年4月1日だが、『その日』に備えて沖縄の日本軍がどんな準備をしてきたのかはもちろん、沖縄師範学校女子部の生徒たちが、なぜ『ひめゆり学徒隊』として従軍することになったのかも、しっかり勉強する必要がある。

それを前提とした上で、本作導入部で展開される1943年夏の運動会の様子は、いかにも日活的な若者像が描かれるので、それはそれとしてしっかり楽しみたい。そこでは、和泉雅子扮する比嘉トミの元気が目立っているが、吉永小百合扮する与那嶺和子と、浜田光夫扮する西里順一郎の、ちょっとした恋模様も・・・。

しかし、沖縄の子供たちを九州へ疎開させた疎開船「対馬丸」の悲劇が登場してくると、それまで色濃く見せていた日活の青春映画の色は完全になくなり、以降、悲劇一色のスト

ーリーに・・・。

■相思樹の他、ふるさと、仰げば尊しも！軍歌も島唄も！■

日活の青春映画では、吉永小百合も石原裕次郎も、和泉雅子も山内賢も主題歌を取っていたが、本作では、冒頭にリクエストされた『相思樹の歌』の他、日本人に最も有名な曲である『ふるさと』と『仰げば尊し』がしっとり歌われるシーケンスが登場するので、それに注目！また、沖縄では『島唄』が有名で、『ひめゆりの塔』（95年）では石嶺聡子の歌った『花』が主題歌にされていたほど。

しかして、本作のクライマックス直前の、ひめゆり学徒隊の隊員たちが一斉に水浴びをするシーンでは、キビナゴといった魚が取れてそれを喜ぶさまを表した島唄『谷茶目（たんちやめ）』を彼女たちが歌い、踊るシーンが登場するので、それにも注目！さらに、本作導入部で沖縄師範学校の男子部が行進する時に歌うのは『元寇』だが、女子たちも軍歌である『轟沈』をしっとりと（？）歌いあげるので、それにも注目！もちろん、本作は『ひめゆりモノ』で、ミュージカルではないが、本作はこれらの曲をじっくり、かつしっとり聴かせるシーンが多いので、それはそれとしてしっかり楽しみたい。

■後半からはアブチラガマが舞台に！■

私は2019年11月17日～19日の沖縄旅行で、糸数アブチラガマを見学した。アブとは深い、巖の洞穴、チラとは崖、ガマとは洞窟のこと。つまり、沖縄戦ではこのアブチラガマ（自然の洞窟）が多くて民間人の避難場所になったわけだ。しかし、同時にそこは日本軍の作戦基地や野戦病院にもなったから、米軍が沖縄島の南端に迫ってくる中、アブチラガマの中で軍人と同居することになった民間人たちの運命は悲惨なものになったのは当然だ。

他方、見学して私が意外に豪華だなと思ったのは、旧海軍司令部壕。これは、1944年に持久戦続行の陣地として設置されたが、沖縄に日本の軍艦そのものがいなくなってしまいう中、沖縄の海軍司令本部は結局海軍としての機能を全く発揮できず、この壕は大田實司令官が自決するだけの場所になってしまった。

しかして、1943年夏の運動会では全員明るかった沖縄師範学校女子部の女学生たちも、「ひめゆり学徒隊」として出陣する後半からは苦難の連続となるうえ、彼女たちが働く舞台は、そのほとんどがアブチラガマの中になっていくことに。

■卒業式の感激は？水浴びの楽しさは？■

私の約30分間にわたる糸数アブチラガマの見学は、70年の生涯の中でも最大級の衝撃だった。だって、真っ暗な洞窟の中を懐中電灯1つだけで恐る恐る上り下りしながら見学（観覧？）し、戻ってきたのだから。「滑らないように」と言われても、手すりのない滑りやすい足元では、最大級の注意を払っても何度かやぶかった。そして、要所要所でのガイドの説明は当時の悲惨な状況をリアルに語りかけるもので、それを聞いていると、アブチラガマの中は、うめき声や悪臭で溢れている感じになってくる。食べ物、飲み物がほと

んどないのは当然だが、こんな狭い洞窟の中で手術をし、大小便をしていたと考えると・・・。そんな体験をしただけに、本作後半に見る、洞窟の中での「ひめゆり学徒隊」の奮闘ぶりに思わず涙が・・・。

もっとも、本作にはいかに日活映画らしい華やか、明るさがある。それは第1に、校長先生（中村錦右衛門）や黒喜名先生（二谷英明）が、生徒たちのために形ばかりとは言え、開催してやる卒業式のシーン。もちろん、その総代は吉永小百合扮する和子だが、そこで歌われる『阿波は舞い』の価値は絶大なものだ。第2は、生徒たちが日本軍の一方反攻が始まるとのデマの中、集団で水浴びを楽しむシーン。素っ裸になっていないものの、若い娘たちが下着姿になって水浴びをするシーンはいいものだ。しかし、その上空に飛来した飛行機は日本軍のもの？いやいや、そんなことはあり得ず、これは米軍機だったから、その直後に起きた悲劇は？大本営のデマを信じたばかりに、彼女たちは？そんな怒りと悲しみで、私の胸はいっぱいに・・・。

■青酸カリ入り牛乳は？手榴弾は？結末は？■

『日本のいちばん長い日』（67年）では、三船敏郎扮する阿南惟幾陸軍大臣の割腹自殺のシーンが見どころだったし、『硫黄島からの手紙』（66年）は渡辺謙扮する栗林忠道陸軍中將の自殺シーンが涙を誘った（『シネマ12』21頁）。また、私の沖縄旅行では、旧海軍司令部では大田實司令官が自殺し、平和祈念公園の奥にある第32軍司令部では牛島満司令官が自殺した場所を見学する中で、当時の彼らの気持ちに思いを致した。しかし、彼らは軍人でも司令官だから、最後に責任を取って自決するのは当然だが、米軍に追い詰められ日本軍の支援もなくなってしまった沖縄の民間人は、一体どうすればいいの？

そこで必要になったのが、青酸カリ入り牛乳であり自決用の手榴弾だが、当時それはどのように使われたの？本作は悲しい結末に向けて、その2つの小道具を使った悲しいストーリーが描かれるので、それに注目！その第1は、足に傷を負い動けなくなった和泉雅子扮するトミが、「私にもください」とおねだりをして受け取った青酸カリ入り牛乳を飲むシーン。第2は、本作ラストで、吉永小百合扮する和子が、残骸の中で最後まで生き残った級友と共に手榴弾を爆発させるシーンだ。これらのシーンは、ドキュメンタリー映画でも再三登場するものだが、当時の日活若手看板女優たる吉永小百合と和泉雅子が演じるこの悲しいシーンを、あなたは どう見て、どう考える？

2020（令和2）年1月27日記